

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 戦時下児童文学における椋鳩十の作品構成と表現：『少年倶楽部』掲載の「嵐を越えて」をめぐって

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2018-04-12 キーワード (Ja): 椋鳩十, 戦時下児童文学, 作家としての姿勢, 作品構成, 表現 キーワード (En): 作成者: 阿部, 奈南 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00007792">https://doi.org/10.18956/00007792</a>

## 戦時下児童文学における椋鳩十の作品構成と表現

—『少年倶楽部』掲載の「嵐を越えて」をめぐって—

阿 部 奈 南

### 要 旨

椋鳩十は、お国に命を捧げることを賛美する時代に、動物の生き抜く姿を通して人間の愛やいのちを描こうとした。昭和16(1941)年に発表された「嵐を越えて」は、燕の過酷な渡りをテーマとする作品であるが、椋が戦時下で『少年倶楽部』に発表した動物文学十五作品の中で唯一、軍艦や水兵、出征軍人の旗が登場する。しかし、戦意高揚とは程遠い作品になっている。

椋は、小説家としてデビューしたもののその作品が問題視され、出版物が伏せ字だらけになるという挫折を味わった。その彼が、戦時下の言論統制のもと、自分自身が書きたいことを模索した結果たどりついたのが子ども向けの動物文学であった。本稿では、この作品の構成や表現、特に母の「静かな聲」について分析し、ほかの書き手の表現とも比較しながら、椋鳩十が作家として「動物の生き抜く姿を通して人間の愛やいのちを描く」姿勢をどのように貫いたのかを論じ、作品を再評価する。

キーワード：椋鳩十、戦時下児童文学、作家としての姿勢、作品構成、表現

### はじめに

椋鳩十(本名、久保田彦穂 1905~1987)の『嵐を越えて』は、昭和16(1941)年五月一日発行の雑誌『少年倶楽部』五月号に掲載された<sup>1)</sup>(挿絵は北宏二<sup>2)</sup>)。昭和18(1943)年に椋の動物文学作品集『動物ども』が三光社から刊行されたが、この作品は収録されていない<sup>3)</sup>。取り上げられることの少ない作品だが、戦後も、いくつかの作品集に収められている<sup>4)</sup>。

椋は、山窩(サンカ)の人々を描く作品を発表して作家活動をスタートした後に、その作品が戦時下の言論統制の中で当局に問題視され、しばらく筆を折った。そののち、『少年倶楽部』など児童向けの雑誌に動物の生き抜く姿を描いた作品を発表、児童文学作家として活躍した。動物の母と子の強い絆をテーマとした作品の数々は、発表された戦時下はもちろん戦後も幅広く読まれ、代表作の一つ『大造爺さんと雁』は現在も小学校の国語教科書に掲載されている。小論では、戦時下で椋が著した作品の中から『嵐を越えて』を取り上げる。この作品は『少年倶楽部』に椋が発表した十五編の動物文学中唯一、軍艦・水兵・出征軍人などが出てくるに

も関わらず、戦争への傾斜が見られない。戦後も仮名遣いなどのわずかな改変のみで作品集に収録されている。本作品は研究対象とされることがほとんどないが、小論ではこの作品を取り上げ、当局に作品が問題視された経験を持つ椋が、日米開戦へ向かう時代の中でどのようにこの作品を構成し表現したのかを考察する。作品の最後に登場する出征軍人の母の「静かな聲」などの表現や構成の検討を通して、この作品を再評価したい。

なお、小論で扱う各テキストは雑誌『少年倶楽部』『幼年倶楽部』、及び作品集『動物ども』掲載・収録の作品であるので、作品名は本来「 」を使うべきであるが、短い引用・強調と区別するため、『 』を使用する。引用部分が多い場合は前後行空けと全体2字下げで示している。本文引用については旧字体を用い、一部字体について新字体を使用した。横書きでの掲載となるため二分の繰り返し記号（く）は使用しない。ルビは省略した。

また、椋は作品中の会話部分をしばしば『 』で表記する。テキスト本文中の会話を引用する際は、テキストのまま『 』を使用することをお断りしておく。

## 1 児童文学作家、椋鳩十の姿勢

作品の構成や表現について考察するにあたり、まず、作品を執筆していた戦時下での椋の姿勢をおさえておかねばならない。

戦時下で動物文学を書きはじめたことについて、椋は当時何も述べてはいないが、戦後、新聞や雑誌などで何度も言及し、当時の作家としての姿勢にふれている。どれを見ても内容はおおむね共通するが、文章の色合いが相当異なっている。ここでは、児童文学作家（志望者）・研究者など、その読者が児童文学に携わる雑誌に掲載された椋自身の文章の中から見ていく。児童文学者協会発行（刊行は盛光社）の雑誌『日本児童文学』昭和44（1969）年2月号、及び昭和48（1973）年8月号に寄せた二つの文章、椋が強い感銘をうけていた児童文学作家、坪田譲二<sup>5)</sup>が主宰する『びわの実学校』88号（昭和53（1978）年7月号）に寄せた文章、合わせて三つを取り上げる。

『日本児童文学』は昭和44年2月号で「動物文学」の特集を組んだ。その中で戸川幸夫など八人の作家が《私の動物文学》として文章を寄せ、戸川に続く二番目が椋の文章（以下、〈A〉とする）<sup>6)</sup>である。

〈A〉では、山窩の人々を主題とする作品が当局から問題視され、発表した作品が伏せ字だらけになって失意を感じた椋の元に、『少年倶楽部』編集長の須藤憲三から児童文学への誘いがあり、その手紙に触発されて動物文学の構想が湧いてきた、と述べる。そして動物たちが命を守ることを通じて「死に向かってかりたてられていく若い人々のためにささげる『いのちの歌』のつもりで書いた」と記す。しかし、〈A〉の文章には、《私の動物文学》に文章を寄せた

他の七人とかかなりの違いがあり、ためらいや苦渋が読み取れる。

椋はまず、「動物と私の結びつきは、臆病者のかくれ家といった関係にあるようだ。」と書きはじめる。そして、文章の終わりの方には

しかし、これは、私にとっては「何の自慢にもならぬ話である。なぜなら、動物の生態という、カクレミノのかげにかくれて、「いのちの歌」を、唄ったにすぎないから……。私というものの臆病が、させたことにすぎないから……。そしてまた、須藤憲三という編集者がいなかったら、おそらく私は、動物文学などに、手をそめなかつたらうから……。(後略)

と、「……」を多用し、「すぎないから……」を繰り返す。さらに最後に自分のこの文章を「とんだ恥さらし」とまで言う。動物文学を書きはじめたのは編集者の強い示唆によるもので、自発的なものではないと深く自覚し、それを含めて、戦時下の作家活動を後ろめたく思う気持ちが強くにじんでいる。

この四年半後の『日本児童文学』昭和48年8月号「処女作の思い出<sup>7)</sup>」(以下、〈B〉とする)では、この後ろめたさが後退する。知り合いの青年が出征するのを見送って胸痛む椋は、その日届いた須藤憲三の「動物文学を書いてはどうか」と勧める手紙を手にして、

そうだ、動物の生態を描きながら、愛情をいのちの問題を、扱ってみよう。この不安な時代に生き、戦地に送られる若者の背後には、愛情の火が、命へのいつくしみが、燃えながら、幾重にも幾重にもとりまいているということを、閉じ込めた物語<sup>マ</sup>と、若い人たちと、その母たちに、ささげよう。動物の生態なら、何とか、こういう時代にも、お目こぼしにあずかれそうだ(後略)(下線、引用者)

と考えた、と記している。下線部の表現に、後ろめたい思いの残影が見える。

その五年後、『びわの実学校』88号に寄せた文章「処女作のころ<sup>8)</sup>」(以下、〈C〉とする)では次のように述べている。

しかし、言論統制のきびしい時代である。子どもの物語といっても油断はできない。書く以上は、自分の気持ち、自分の考えを盛りこまなかったら、筆を絶ったほうがよい。自分の思うことを、こういう時代に、書ける方法、それを考えなければならない。このことは、しかし、案外、すらすらと頭に浮かんできた。

野生動物の習性にことよせて、描いたら、文句のつけようはなかるうと思った。戦争が

ますます烈しさを加えていき、戦死者が、毎日毎日、白い布につつまれて帰ってくる時代であったので、私は、動物の習性にことよせて、戦地、すなわち死に向かって、召されていく若者の背後に何があるのか。ということ、動物の母子の深い愛情で暗示しようと思った。また、死を賛美する時代であったので、動物どもが、あらゆる場面で、生きのびる美しさを暗示的に描こうと考えた。こんな風にして、初めて書いたのが、昭和十三年、少年倶楽部に発表した『山の太郎熊』であった。（下線、引用者）

ここには〈A〉の苦渋や後ろめたさは見当たらない。下線部は、〈B〉の下線部に相当するが、「お目こぼしにあずかる」といった受け身の表現ではない。「暗示」ということばを二度使い、自分が読者に伝えたいメッセージをこめて作品を書いた、と述べている。

この変遷を、言論の自由を保証された戦後の安全地帯で自分の過去について口を拭う、「自己保身」、「自己満足」ととらえることもできよう。

確かに、椋は、大政翼賛的な傾向が強い雑誌『少年倶楽部』に動物文学を発表し続けただけではない。鈴木敬司、長谷川潮、鳥越信などが指摘するように、椋は『少年倶楽部』の兄弟雑誌『幼年倶楽部』に、戦意高揚と直接的に結びつく作品『太郎のかた』（昭和17（1942）年6月号）、ルポルタージュ『軍神につづく横山少年團』（昭和19（1944）年1月号）を書いている<sup>9)</sup>。内山三枝子・棚橋美代子は、この二作品について分析し、椋が軍国的な時流に流されていたことを指摘した<sup>10)</sup>。

しかし、椋は戦争を積極的に肯定していたわけではない。椋の長男である久保田喬彦が椋の思い出を記した『父・椋鳩十物語』によれば、戦争ものを書くようせがむ息子たちに対して、「お父さんはね。動物の小説を書く作家だから、戦争のことは書けないんだよ」と言い、軍馬や軍用犬について調べてみようか、などと答えたが、結局下調べもしていなかったという<sup>11)</sup>。動物文学に関しては戦争と距離を置こうとした椋の姿勢の現われである。先に挙げた椋の三つの文章の変遷は、時流に流されてしまった自分を恥じつつも作家としての自分が戦時下で描きかかったものは何か、振り返りの中で確信していく過程ととらえることができる。椋が一貫して述べているのは、「いのちの歌〈A〉」を、「愛情をいのちの問題〈B〉」を、「生きのびる美しさ〈C〉」を描こうとした、ということである。椋は、ここに挙げた〈A〉〈B〉〈C〉を含む一連の文章を書く中で、戦時下における動物文学作家としての自身の著作活動を、あの時代に書きかかったことを書くぎりぎりのものであったと、再確認したのではなかろうか。

先に述べたように、『少年倶楽部』に椋が発表した動物文学で、軍艦・水兵・出征軍人などが出てくるのは『嵐を越えて』で、戦時下の椋は、先述の「いのちの歌〈A〉」や「愛情をいのちの問題を〈B〉」、「生きのびる美しさ〈C〉」をどのように文章にしたのだろうか。

戦時下児童文学作品を読む場合、作家の戦争責任を問う視点も当然必要であるが、ここでは

その時代の制限の中で、作家として生き書きたいことを書き続けるために、椋がどのようにことばを紡いだかを考える<sup>12)</sup>。

## 2 『嵐を越えて』の概要とその評価

まず、作品の概要を以下に示す。

『嵐を越えて』は、燕がさまざまな苦難を乗り越え、古巣のある日本の家にたどり着く、という内容で、六つの節からなっており、作品の最後は軒先の燕の背に朝日が美しく光る描写で結ばれる。

- 〔一〕 燕の群れが「なつかしい北の國の古巣」（ここには日本とは書かれていない）に向けて南洋の海岸を旅立つ。群れは老いた燕に導かれ、夜も休まず一直線に北へ向かう。
- 〔二〕 群れは嵐の中に突っ込み、さらに竜巻にほんろうされてたくさんの燕が吹き飛ばされる。リーダーの燕は残った燕を率いて北を目指して行ってしまう。
- 〔三〕 岩ばかりの島に不時着した「頭のまんやかに、一二本の白いまじり毛のある燕」が、残った仲間を導いて旅を続ける。
- 〔四〕 途中で二羽の隼に襲われる。「まじり毛燕」は怪我をしたふりをし、隼を引き付けて仲間を逃がすが、隼の攻撃をかわし損ねる。
- 〔五〕 瀕死の「まじり毛燕」は日本海軍の軍艦に落ちて水兵に拾われ、元気を取り戻す。水兵たちは口ぐちに燕に話しかけながら燕を空へ放す。
- 〔六〕 「まじり毛燕」は日本にたどりつき、去年も巣作りをした家に戻ってくる。その家の子どもが力いっぱいさえず燕を見つけ、うれしそうに母に伝える。

この作品はこれまでの研究の中で椋の主要作品とは扱われず、先行研究のほとんどは他の作品との関連での言及である。

まず、阿部真人は、『日本の動物文学』において、主題は、誰も賛美してくれる人も無いまま自らの生を全うするために、海を越え嵐を乗り越えてはばたく燕である、と指摘し、作品の最後の部分に注目し次のように述べる。

『嵐を越えて』も、『栗野岳の主』と同様な手法に支えられた作品である。ここにも、動物のえらぶつぶりを直接賛美する人物は登場しない。(中略)

作者のツバメに対するいとおしみは、朝日をとおして語られているのである。(中略)それは清らかな光り輝く世界であり、『栗野岳の主』で賛美された世界と同じ趣のもの

いえよう<sup>13)</sup>。

たかし よいち は『椋鳩十の本 補巻二 椋鳩十の軌跡』において、ストーリー構成や主題の設定などから、椋の主要作品の一つ『大造爺さんと雁』について『嵐を越えて』の「延長線上にある作品」と推測する<sup>14)</sup>。また、椋が『少年倶楽部』に発表した十五編の作品中、唯一戦時下という時代を背景に、軍艦と水兵が登場することを指摘したうえで、「確かに、軍艦や水兵や日の丸は出てきても、戦争を謳歌するようなことは一言も書かれていない。むしろ、海を渡る健気な一羽のツバメがこの物語の主題である。」と述べる。

また、鈴木敬司は、『少年倶楽部』に掲載された『嵐を越えて』を含む十五編自体こそ、椋が「あの「暗い谷間の時代」と呼ばれる時代を、ほとんど比類をみないほどの平衡感覚をもって見事に生き抜いた」ことを論証する、と述べる<sup>15)</sup>。

鈴木が「平衡感覚」と呼んだものには、時代や社会の変化にも揺らがない普遍性が底流するであろう。そして、ていねいに読んでいくと、「戦争を謳歌するようなことは一言も書かれていない(たかし)」だけではない。後述するように、椋は燕の渡りを主題としながら、この作品で、「死に向かってかりたてられていく若い人々のためにささげる『いのちの歌』〈A〉」を書いているのである。

### 3 『嵐を越えて』を、どのように「読む」か

さて、この作品は燕の生態——その過酷な渡りを描くが、全く異なる二つの視点で読むことができる。

一つは戦時下児童文学が宿命的に背負った、軍国的な視点からの読みである。この物語が戦時下のお話であることは、「まじり毛燕」が日本海軍の軍艦に落ち、「若い、元気な日本の水兵さん」に保護される設定や、戻ってきた家の門口で「出征軍人の日の丸の旗が、朝風に、きもちよくゆれてる」る描写に明確に表れている。さらに、この家の「出征軍人」がこの家のまだ若い息子であろうこともさりげなく描き込まれている。燕が帰って来た、と知らせる子どもに対して、母は、『さうかい。戦地の兄さんに、そのことも書いてあげるとい、ね。』と「静かな聲」で答えているのである。

この作品が掲載された号の表紙には、男の子が戦車の模型に色を塗る姿がえがかれ、目次を見ても、椋が言う「死を賛美する〈C〉」文章が大勢を占める。広告も同様である。このような流れから作品を見れば、「小さく弱い鳥が大きな苦難を乗り越え、猛禽の攻撃に自分の身をも投げ出して他を助け、ついに目的を達する」というあらすじは、大国を相手に戦う日本(小国)の勇ましい姿を示すように読める。

また、第二節で老いた燕に導かれ、群れが嵐の中鳴きながら飛ぶシーンの表現は、戦闘で敵の攻撃の中、上官の命令で勇猛果敢に敵に向かっていく兵士の姿を想起させる。

けれど老いた燕は、／ジユク、ジユク、ジユクジユクジユク／鳴きながら、あひかはらず先頭を、一心に飛んでゐました。／『進むのだ、進むのだ。進むことだけがわれわれの生きる道だ。』／老いた燕の聲は、そんなふう聞こえました。／ジユク、ジユク、ジユクジユクジユク／あとにつづいた、幾千羽の燕どもも叫びました。／『そうだ、進むのだ。進むことだけだ。』／そんなふうに叫んでゐるように思はれました。(／は改行を表す。引用者による。)

第四節で、「まじり毛燕」が仲間を守るために、「燕返し」で隼に立ち向かう場面はまさに、大義のために命を捧げる「滅私奉公」と重なり合う。

「まじり毛燕」が軍艦に落ちる第五節では、傷ついた燕を世話する〈優しい水兵さんたち〉が登場する。もちろん水兵たちは国を守り、お国のために戦うべく航海している。そして、最後の第六節で、出征軍人の日の丸の旗は、「きもちよくゆれて」いる(下線、引用者)、と「出征」に肯定的とも取れる形容詞が使われている。

このように、『嵐を越えて』は戦時の状況を背景とすることはもちろん、表面的には戦意高揚の方向の作品として読むことも可能である。

しかし、たかしが言うように、「戦争を謳歌するようなことは一言も書かれていない」し、この作品の表現を細かく見ていくと、「戦意高揚」とは全く異なるもう一つの読みが浮かび上がる。

動物の世界には生存をかけた戦いはあっても、戦争という概念自体が無い。第二節の老いた燕と群れの鳴き声は、過酷な渡りをする燕が本能に導かれて生き抜くために発したものであり、「お国のために死ぬ」進軍ではない。椋自身が「死を賛美する時代であったので、動物どもが、あらゆる場面で、生きのびる美しさを暗示的に描こうと考えた。〈C〉」と述べるとおりである。また第四節の隼に対する決死の行動も、群れで行動する燕の、種が生き残るための戦いである。

さらに注目すべきは第五節後半である。軍艦の水兵たちは、元気になった燕に向かって「私たちが敵を倒して頑張るぞ」といった好戦的なことばを口にしない。『おれの家は、金澤の雑貨屋だ。そこの軒に巣をつくるんだぞ。』『おれは鹿兒島の漁師だ。いゝか、茅葺の家だ、そこに行けよ。』と口々に声をかけて送り出す。水兵たちは、戻りたくても戻れない故郷、そこで営まれる家族とのささやかな暮らしへの思いを、飛び立つ燕に託している。この部分について、軍艦を遠洋漁業の船に置き換え、船員の望郷の思いをこめたことばとしてもおかしくはない。だがここでは、死と隣り合わせの水兵たちが抱く思いの深さが、懐かしい故郷の地名一つひと



つに込められる。その思いの吐露は、「お国のために命を捧げる」ものではない。しかし、「故郷=くに」を懐かしむ心情は国家の大義名分たる「愛国」とも読み替えるため、当局の検閲では問題とならない。

軍艦を後にしてからも燕はたった一羽で困難な旅を続けているはずだが、棕はそれを省略し、第六節、「燕は日本に飛んできました。」と書きはじめる。以下に、第六節の全文を引用してみる。

燕は日本に飛んできました。／去年と同じやうに、庭先には、すもゝの花が白く咲いていました。／門口には、電信柱よりも高く、出征軍人の日の丸の旗が、朝風に、きもちよくゆれておりました。／まじり毛の燕は、愉快で愉快でたまりませんでした。／ピチ、ピチピチピチピチ／力いつぱいの聲で歌ひました。／『あゝ、お母さん、去年の燕が、また歸つてきたよ。』／こゝの家の、元氣さうな子供がうれしさうに叫びました。／『さうかい。戦地の兄さんに、そのことも書いてあげるといゝね。』／家の中で、お母さんは静かな聲でいひました。／日本の朝日が、清らかな朝日が、軒先の燕の背に、ちかちかと美しく光つておりました。(をはり) (／は改行を表す。引用者による。)

主人公である健気な燕にとって、人間の戦争や悲喜こもごもは全く関係ない。しかし、この第五節と第六節の展開では、この燕が人の思いを〈つなぐ〉ものとして機能している。燕は、水兵たちの故郷への思いを託されて、日本に戻ってくる。そこは、出征軍人の家であるが、どうやら「金澤の雑貨屋」でもなければ「鹿兒島の漁師」の家でもない。しかし、その家は、水兵らが心に浮かべた各々の故郷の家と同質である。出征した息子を思い、案じる母が待っているからである。さらに、この家の所在地が具体的に示されないことによって、彼女はいわば「金澤」「鹿兒島」で待つ母と変換可能な存在となる。こうして、燕を送り出した水兵たちの思いのベクトルと、燕の帰還を受け止める母の思いのベクトルが、燕によってつながる構成となっている。第五節が飛び立つ燕を描いて終わり、第六節の冒頭を、いきなり「燕は日本に飛んできました。」とすることにより、この構成が生きてくる。

そして、この子どもと母の短い会話描写は、「戦地のお兄さん」ということばがあるにもかかわらず「戦意高揚」とは性格を異にする。

『嵐を越えて』が発表された二年後の昭和18(1943)年、『幼年倶楽部』5月号に『南のせんちから来た 燕』という科学読み物が掲載された<sup>16)</sup>。鳥類学者内田清之助が、「秋田縣のゐなか」の父と子どもたちとの会話の形で、燕の習性を解説した読み物である。子どもたちが燕の訪れを嬉しそうに受け止める部分は『嵐を越えて』と共通する。しかし、父は燕の渡りを次のように解説する。

とほい南の國——たとへば、こんど日本のおかげで、へいわになったフィリピンや、マライや、ジャワなどからとんで来るのだ。きつと 日本**の**兵たいさんの勇ましくわつやくぶりを 空から見たことだらう。(下線、引用者)

燕の習性の説明は下線部以外の部分である。下線部は明らかに、戦争を積極的に肯定し、「大東亜共栄圏」構築のための南方派兵を称揚するべく意図的に挿入したものである<sup>17)</sup>。先述の『嵐を越えて』の、母と子の短いやりとりと比べるとその違いは一目瞭然である。

『嵐を越えて』が戦意高揚を意図するものであれば、家族のことばの中に「戦地で勇ましく活躍しているお兄さん」「私たちが燕のように頑張って銃後の護りを」といったことばが散りばめられただろう。しかし、母はただ『さうかい。戦地の兄さんに、そのことも書いてあげるとい、ね。』とだけ「静かな聲」で応えるのである。帰って来た燕のニュースは、戦地の息子へ送る手紙に書くちょっとしたエピソードであるが、「今年もあの燕が帰ってきました。燕のように、戦地のあなたもつつがなく帰宅できるように」と息子の安全を祈るものとして読むことができる。この部分は、読者である戦時下の子どもたちには〈戦地のお兄さんを励ます〉方向で読み流されていたかもしれない。しかし、母のそのことばが「静かな聲(傍点、引用者)」で語られたことにより、「戦意高揚」とは全く異なる読みが浮かび上がる。

#### 4 母の「静かな聲」について

第六節の文脈では、母と子の会話部分から「静かな聲」を抜いて、「家の中で、お母さんはひました。」としても全く問題はない。しかし、椋はこの母にあえて「静かな聲」で語らせた。

椋は、戦後に「母と子の二十分間読書運動」を推進した人物としても知られている。読書運動関連の著作や講演のいくつかを見ると、椋が「母の声」に注目していたことがわかる<sup>18)</sup>。また、声はその人の様子や性格を表し、あるいは、その意思や感情を反映する。戦時下の作品『嵐を越えて』の母のひとことが、「静かな聲」による発話であることを読み流すことはできない。

形容動詞「しずかな」の辞書的な意味は、「物音がしないでひっそりとしているさま」「動かないでじっとしているさま」「落ち着いているさま。穏やかなさま」「口数が少なく、おとなしいさま」である<sup>19)</sup>。『嵐を越えて』の第六節では、母の落ち着いた様子や性格を明示する必然性はない。では、この「静かな聲」は辞書的な意味を超えてどのようなものを表現するのだろうか。

「しずかな」声は、「朗らかな」声や「明るい」声の持つような積極的・肯定的なイメージを持たない。それは肯定ではないが、否定でもない。また、「しずかな」声には音量の抑制だけではなく、感情の抑制が含まれる。しかもそれは「沈黙」ではない。抑制された感情は、その

感情が強いものであればあるほど、その声の響きの中に沈殿して聞く力を持つ聞き手（読者）に届く。この母が胸に秘めているのは、出征した息子の身の安全を、無事帰還を願う強い思いである。戦時下の母は、お国のために強い子どもを産み育て、お国に捧げることが責務とされた。母のわが子を案じる「悲しげな」「寂しげな」声は、軍国の母の幻想に反する。しかし、感情が抑制された「静かな聲」はそこに抵触しない。

棕は『嵐を越えて』のほかに、自身の動物文学集『動物ども』に入っている『鶏通信<sup>20)</sup>』に、「静かな聲」という表現を使っている。鷹に雛を狙われた母鶏は、烈しく砂を跳ね飛ばして対抗する。鷹が退散した後の母鶏を、棕は次のように描写する。

母鶏は雛たちにとりかこまれて、こつ、こつ、こつ、と静かな聲を立て、探し出した餌を雛たちの足下に落してやりました。

それは、無事であつた子供たちにかこまれて、先ほどうけた痛手も心配も、けろりと忘れて、幸福な気持ちにひたつてゐるお母さん。といつたやうな、まことにおだやかな姿でありました。（下線、引用者）

この母鶏の「静かな聲」は、『嵐を越えて』で人間の母が発した「静かな聲」のような抑制された感情を含んでいない。それは鶏が感情を持たないからではない。『鶏通信』という作品がまさに動物の生きのびる姿を描いたものであり、鶏の母が、恐ろしい鷹に自ら立ち向かい、力を尽くして我が子を守り抜いているからである。『嵐を越えて』の人間の母は我が子をその手で守るところか、気遣うことばさえ自由に口にはできない。もし、『動物ども』に『嵐を越えて』も収録されていたとしたら、二作品の「静かな聲」の対比は、戦争の理不尽さを「暗示」したであろう。

## 5 利用される母の声

戦時下の児童文学には、軍国の母を描いたものが多い。『嵐を越えて』の母の「静かな聲」を考えるうえで、軍国の母たちの「聲」にも耳を傾ける必要がある。長谷川潮は、『児童戦争読み物の近代』において軍国の母物として『水兵の母』と『一太郎やあい』を取り上げている<sup>21)</sup>。実話に基づくこの二つの軍国美談がどのように教科書に取り上げられたかについては、中内俊夫が『軍国美談と教科書』において詳細に論じた<sup>22)</sup>。ここでは、紙面の関係上、戦時下で多くの子どもたちが目にした軍国の母の美談の一つとして、『一太郎やあい』を取り上げる。『一太郎やあい』は、日露戦争の折、出征する船上の息子岡田樫太郎に向かって老母かめが港から呼びかけた実話が元になっている。さまざまな作家によってリライトされ、軍国の母もの

として広く流布した。この一連の「一太郎」の母の「聲」が、社会の中でどのように変容したのか、中内前掲書を参考にしつつ概観し、戦時下でどう扱われたか見ておきたい。

この作品の題名は、船出する息子に向かって老母が叫んだ息子の名にちなむ。かめの行動は、居合わせた人々によって愛国の精神を体現するものと受け取られ、ついには1918年から1932年まで使用された尋常小學校國語讀本卷七に、『第十三 一太郎やあい』として登場した（第三期国定教科書）。その後、米山露花<sup>23)</sup>『一太郎やあい』（『童話新集』桃色のお家 中村書店 1924年 11—22頁）、『大倉桃郎『一太郎やあい』（幼年俱樂部』第三卷五号 大日本雄辯會講談社 1928年 17—24頁）など「一太郎」関連の本や記事が続き、映画化されてもいる<sup>24)</sup>。

国定教科書では老母が息子に呼びかける場面のみを取り上げている。要約すると次のような話である。

出征する兵士を乗せた船が出港しようとした時、一人の老婆が見送りの人たちを押し分けて、前へ出てきた。老婆は出港する船に向かって「一太郎やあい。其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げろ。」と叫んだ。息子らしき兵士が鐵砲を掲げると、老婆は「うちのことはしんばいするな。天子様によく御ほうこうするだよ。わかつたらもう一度鐵砲を上げろ。」と叫び、再び鐵砲が掲げられた。老婆は見送りのため、朝から五里の山道を歩いてきたのだった。「郡長をはじめ、見送の人々はみんな泣いたといふことである<sup>25)</sup>」と結ばれるが、老母の悲しみはどの作品にも描かれない。

もちろん、日本の勝利を信じ、我が子の活躍を期待して積極的に戦地に送り出す母もいたであろう。戦地での活躍は、貧困を抜け出す近道となり、息子を育てた母の誉れともなる。だが、頼みとする一人息子の出征に際して、老母には「無事に戻れ」という気持ちがあった。

この軍国美談の「その後」が1921年、朝日新聞によって「今は廢兵の勇士が悲惨な生活」とスクープされ、美談と実話のギャップが浮き彫りにされた<sup>26)</sup>。この〈不都合な真実〉は「軍国日本の屋台骨をゆるがしかねない（中内）」ものであり、調査が行われた。そして、実話の老母、岡田かめが、悲痛な思いで息子の名を叫んでいた事実が判明する。中内が前掲書で引用した『文部時報<sup>27)</sup>』五七号の「國語讀本所載事項の原拠に関する香川県の通牒」（1921年11月3日）の参考欄<sup>28)</sup>にある報告には、教科書にある「天子様によく御ほうこう」といった軍国の母らしき発言は全く無い。老母は「オカアは待つて居るぞよ」「しっかりやって来いよ」と叫んでいる。報告でその後続く「出征して帰れ」も、「出世」に、香川県の役人である記録者が「出征」という熟語を当てたと推測できる。また、二度目の出征のおりの母かめのことば、「泣いて送るよりも泣かずに送るのが実にいうに言えぬ悲しいものだ<sup>29)</sup>」も報告されている。

しかし、この老母の叫ぶ声は、世の中で喧伝されるうちに実話からどんどん離れ、軍国の母にふさわしい激しいことばに変化していく。『幼年俱樂部』の『一太郎やあい』で、大倉桃郎は実話に即して母一人子一人の貧しい暮らしから書き起こすが、お国のために働くよう叫ぶ勇

ましい老母の行動に、県知事等が感涙をこぼした、とし、息子が二度の従軍を経て故郷に錦を飾り母と仲良く暮らした、と、実話とは全く異なるハッピーエンドで結ぶ。かけがえのない一人息子までも老いた貧しい母から容赦なく取り上げていく「国」や「戦争」の理不尽さが、軍国の母が叫ぶ模範的なことばによって打ち消される<sup>30)</sup>。

米山露花の『一太郎やあい』の老母はさらに〈軍国の母〉である。物語の初めから軍国的な言動をする老母に、米山は最後には、

一太郎やあい……………<sup>ママ</sup>家のことや私の事など思ふなよ、天子様の爲めだ。死んで歸つて来いよ、名譽の戦死をして来い、判つたら、今一度鐵砲を振つて見せてくれよ、一太郎やあい……………<sup>ママ</sup>

とまで言わせている。

戦時下のスローガンは大きな声で勇ましく叫ぶように唱えられた。「叫ぶ」という激しさを伴う行為は、軍国主義と親和性が高い。そのために、実際に母が叫んだ「待つて居る」「(出世して) 帰れ」という悲しみを秘めたことばは、読み替えられ、軍国の母の勇ましい叱咤激励にねじ曲げられてしまった。

この話が初めて国定教科書に載ったのは、1918年、椋の小学校卒業後だが、さまざまな媒体に継続して取り上げられ、広く知られている。また、朝日新聞による、この軍国美談の「その後」スクープが話題を呼んだ1921年、椋は十六歳である。作家椋の意識の中に、『一太郎やあい』の老母のような、軍国美談に作り変えられた母たちが存在したことは想像に難くない。

## 6 母の「静かな聲」が描き出すもの

前述のような軍国の母の叫ぶ声に対して、「静かな聲」で語られることばは、当局の都合の良いように読み替えられて一人歩きすることはない。そして、その母の「静かな聲」によるひとことは、椋が描きたいと考えていたことを凝縮している。つまり、『嵐を越えて』の「静かな聲」の母は、椋のいう「この不安な時代に生き、戦地に送られる若者の背後には、愛情の火が、命へのいつくしみが、燃えながら、幾重にも幾重にもとりまいているということ〈B〉」の象徴である。「静かな聲」の母は、「この不安な時代に生き、戦地に送られる若者」である水兵たちの思いを受け止める。

椋がその動物文学第一作『山の太郎熊』から一貫して主題としてきた、我が子を守りぬこうとする母の愛は、戦時下の人間社会では決してことばにはならないものである。ヒトという動物が本能のまま生きのびよう、我が子を守り抜こうとふるまうことを、戦争は国家の名の

もとに否定するからである。我が子の生命が危ういかもしいかな状況下で、人間の母は〈待つ〉〈祈る〉〈願う〉しかない。そのうえで〈待つ〉〈祈る〉〈願う〉母の「静かな聲」の中で静かに灯り続ける「愛情の火〈B〉」が、戦争の理不尽さを照らし出す。

## おわりに

最初に述べたように、戦時下の作家たちはその作品が検閲を受け、さまざまな制約のもと著作活動をせざるを得なかった。児童文学も同様に、昭和13年10月25日に決定された「児童読物改善二関スル内務省指示要綱」にしたがって統制され、多くの児童読み物が処分された。『嵐を越えて』が掲載された『少年倶楽部』発行元の講談社も、よく知られた「講談社絵本」などが検閲により処分対象となっている。このような社会の中で、作品を世に出していく作家たちは体制に迎合しないまでも、その表現の隅々にまで細心の注意を払わなければならなかった。最初に発表した大人向けの小説が検閲対象となり、自身も特高の監視を受けた椋にとっては、児童向けの動物文学であっても注意に注意を重ねての執筆であった。

そのような状況の中で椋は、確かに二つの軍国的な作品も書いてはいるが、動物文学のジャンルでは時流に流された作品を残していない。『嵐を越えて』の軍艦や水兵、出征軍人の旗の描写は、勇ましい戦争ものを書いてほしい、とせがんだという息子たちの要望<sup>31)</sup>を作品に反映したものだったかもしれない。しかし椋は、その戦争の時代の要素を使い、逆に「戦地、すなわち死に向かって、召されていく若者の背後に何があるのか〈C〉」を描きだした。家族が待つ故郷に対する水兵たちの思いが、戦地にある息子を思って待つしかない母の思いが、作品にさりげなく書き込まれる。そして椋は『嵐を越えて』第六節の「力いつぱいの聲で歌う燕のさえずりに重ねて、戦時下で生きる人間のために『いのちの歌』を、唄った〈A〉」のである。

『嵐を越えて』は、『大造爺さんと雁』などと比べると現在ほとんど顧みられることのない作品ではある。しかし、春になると当たり前のように人々の周りを飛ぶ燕たちの、実は苦難に満ちた渡りを主題とするのみならず、「自分の思うことを、こういう時代に、書ける方法〈C〉」を模索し、ことばを紡ぎだした椋が、作家としての矜持を貫いて構成、表現した作品の一つと言えよう。

〈注〉

- 1) 第二八卷五号、大日本雄辯會講談社 1941年 110—119頁。椋の長男、久保田喬彦によれば、当時の椋の作品は書き上げた半年後、一年後に掲載されたいしい(久保田喬彦『父・椋鳩十物語』(理論社 1997年 112—114頁)。とすれば、この作品は昭和一五(1940)年ころ書かれたものと考えられる。
- 2) 北は、戦後韓国に戻って活動し、韓国漫画家協会の会長を務めた金龍煥。(高晟竣「在朝鮮日本人漫画家の活動について—岩本正二を中心に」新潟県立万代島美術館研究紀要』第13号 新潟県立万代島美術館 2014年 7頁による。
- 3) 鈴木敬司『椋鳩十研究——戦時下の軌跡』(菁柿堂 2006年 184頁)によれば、椋の手元に掲載誌が無かったため。
- 4) 椋の全集の他に、日本の名作文庫32『月の輪グマ』ポプラ社 1977年、椋鳩十まるごと動物ものがたり12『椋鳩十の小鳥物語』絵 理論社 1996年、椋鳩十名作選6『モモちゃんとかかぬ』理論社 2014年 などがある。
- 5) たかし よいち『椋鳩十の世界』講談社 1982年 2—6頁。
- 6) 椋鳩十「私と動物文学」『日本児童文学』昭和44年2月号 盛光社 1969年 46—48頁。
- 7) 椋鳩十「私の処女作」『日本児童文学』昭和48年8月号 盛光社 1973年 118—119頁。
- 8) 椋鳩十「処女作のころ」『びわの実学校』88号「わたしの処女作 第十五回」びわの実文庫 1978年 30—31頁。
- 9) 鈴木敬司「椋鳩十の死を悼む」『文学と教育の会報』第13号 1988年、長谷川潮 日本児童文化史叢書二一『児童戦争読み物の近代』久山社 1999年、鳥越信「椋児童文学研究の新しい局面を迎えて」『紀要 椋鳩十・人と文学』10号 椋鳩十記念館 2005年12—18頁など。
- 10) 内山三枝子・棚橋美代子「椋鳩十作『軍神につづく横山少年團』成立の背景に関する資料」『京都女子大学発達教育学部紀要』第5号 京都女子大学発達教育学部 2009年 11—20頁。内山三枝子・棚橋美代子「椋鳩十作『太郎のかた』に関する一考察」『京都女子大学発達教育学部紀要』第八号京都女子大学発達教育学部 2013年 69—77頁。
- 11) 久保田喬彦『父・椋鳩十物語』理論社 1997年113頁。
- 12) 『軍神につづく横山少年團』のように出版社から指定されたものを扱うルポルタージュの場合、書き手の側に主題を設定する余地はないし、書き方も制限される。それは、内山・棚橋が指摘するとおりに時流に流される一面を持つ。小論では触れなかったが、論者はルポルタージュ『軍神につづく横山少年團』に関しても、実は椋が「自分の思うことを、こういう時代に、書ける方法(C)」をぎりぎりまで模索したと考えている。
- 13) 阿部真人(阿部雅子)「「えらぶつ」賛美の手法——初期作品の特質をさぐる」『日本の動物文学』第三章 溪水社 1994年 234頁。
- 14) たかし よいち「健気なツバメ主題に」、「傑作「大造爺さんと雁」」『椋鳩十の本 補巻二 椋鳩十の軌

- 跡』理論社 1990年 154—160頁。
- 15) 鈴木敬司「椋鳩十と動物文学」『椋鳩十研究——戦時下の軌跡』17—18頁。
  - 16) 『幼年倶楽部』昭和18年5月号 大日本雄辯會講談社 63—67頁。
  - 17) 戦時下における内田の姿勢はかなり軍国的であり、大人向けに著した『鳥』（創元社 1942年）でも、南洋からの渡り鳥の項で渡りの経路について「即ち其の範囲は所謂大東亞共榮圏と全く一致する。（中略）今になって（大東亞共榮圏などと言って）騒ぎ出した人間達を心密かに冷笑して居るかも知れぬ（106頁）。」など、時局に合わせた戦意高揚的な表現が多い。また、内田はこの本の序文で「いはゆる動物文学」に苦言を呈し、「徒に興味本位にのみ走り（中略）科学的にはどうかと思はれるやうな弊も屢々起りがち（2—3頁）」と述べているが、椋の作品がその批判の対象か否かはわからない。
  - 18) 椋鳩十『本のすすめ 読書随想と対談』『椋鳩十の本』第二七巻 理論社1989年など。
  - 19) 『大辞林』「しずか」の項など。
  - 20) 椋鳩十『動物ども』三光社 1943年 249—266頁。椋はこの本の序文を、「アメリカ人の心ない、むやみやたらな捕獲によつて、今日ではまつたく滅ぼされてしまつた」リョコウバトから書き起こす。一時時流に合わせた書き方ではあるが、事実を淡々と描いており、本稿第一節で取り上げた姿勢がうかがえる。
  - 21) 長谷川潮『児童戦争読み物の近代』久山社 1999年 64—72頁。
  - 22) 中内俊夫「Ⅱ 軍国美談と民衆——軍事教材改廃の歴史」『軍国美談と教科書』岩波新書 1988年 31—132頁。
  - 23) 国立国会図書館のデジタルライブラリーによる。国会図書館の書誌データは中表紙の「若月賢」を著者とするが、表紙や奥付は「米山露花」を著者とする。よつて、小論ではこちらを採用した。
  - 24) 童話ではほかに、野崎迂文『愛国美談 一太郎やあい』高文館 1921年、三石文一『実話一太郎やあい』児童教育社 1931年など。大人向けでは、八波則吉『母の勝利』英進社 1942年など。『母の勝利』唯一の口絵写真は、『一太郎やあい』の実話の母、岡田かめの銅像である。映画では牧野教育映画製作所（1921年）、松竹キネマ（1931年 高嶺秀子も出演）など。
  - 25) 引用は『日本教科大系 近代編 第七巻「国語（四）」』（講談社 1963年）による。教科書の監修に携わつた八波則吉は、この教科書の文を『母の勝利』中にも再録し、実話とのギャップや、自身の驚愕にも触れながら、なおこの話が強い軍国の母の物語である、と述べている。
  - 26) 大正一〇年一〇月一日第五面（朝日新聞 聞蔵Ⅱによる）。
  - 27) 文部省の定期刊行雑誌。文部行政に関して一般に広報することを目的とする。
  - 28) 中内 前掲書 72—73頁。
  - 29) 中内 前掲書 69頁。
  - 30) とはいえ、やはりその理不尽さは、全くなくなるわけではない。『一太郎やあい』が、中内の言う軍国的に「弱い教材」だったのは、文章の中に戦争の理不尽さが漂ってしまうことにもよるのではなからうか。
  - 31) 久保田喬彦 前掲『父・椋鳩十物語』113頁。



## 参考文献

- 阿部真人『椋鳩十文学の研究』大日本図書、1984年。
- 阿部真人（阿部雅子）『日本の動物文学』溪水社、1994年。 ※阿部1984の再版
- 内山三枝子・棚橋美代子「椋鳩十作『軍神につづく横山少年團』成立の背景に関する資料」『京都女子大学発達教育学部紀要』第5号、京都女子大学発達教育学部、2009年、11—20頁。
- 内山三枝子・棚橋美代子「椋鳩十作『太郎のかた』に関する一考察」『京都女子大学発達教育学部紀要』第八号京都女子大学発達教育学部 2013年 69—77頁。
- 久保田喬彦『父・椋鳩十物語』理論社、1997年。
- 鈴木敬司「椋鳩十と動物文学」『椋鳩十研究——戦時下の軌跡』菁柿堂、2006年。
- 鈴木敬司「椋鳩十の死を悼む」『文学と教育の会会報』第13号、1988年。
- たかしよいち『椋鳩十の世界』理論社、1982年。
- たかしよいち『椋鳩十の本 補巻2 椋鳩十の軌跡』理論社、1990年、pp.154～156。
- 鳥越信「椋鳩十文学研究の新しい局面を迎えて」『紀要 椋鳩十 人と文学』第10号、2005年3月、pp.12～18。
- 中内俊夫『軍国美談と教科書』岩波書店、1988年。
- 滑川道夫編『吉田甲子太郎 椋鳩十 林芙美子 田畑修一郎』（日本児童文学大系24）ほるぷ出版、1977年（椋鳩十 解説：大藤幹夫 pp.397～407、椋鳩十 年譜：大原洋子 pp.449～456、椋鳩十 参考文献：大原洋子 pp.478～480）。
- 長谷川潮 日本児童文化史叢書21『児童戦争読み物の近代』久山社、1999年。
- 椋鳩十『お母さんの声は金の鈴』あすなろ書房、1991年。
- 椋鳩十『椋鳩十の本』第27巻『本のすすめ 読書随想と対談』理論社、1989年。
- 山中恒『戦時児童文学論』大月書店、2010年。
- 山中恒『少国民戦争文化史』勁草書房発売、辺境社発行、2013年。

（あべ・なな 短期大学部准教授）